

第2回 これからの市立高等学校のあり方に関する有識者会議 議事要旨

- 1 日時 令和6年4月26日(金) 10時～11時20分
- 2 場所 神戸市総合教育センター 701号室
- 3 出席者 浅野良一会長、井上和彦委員、鴨井幸造委員、齋藤勝洋委員、佐合純委員、佐藤春実委員、野村和宏委員
(岡田恵実委員、船木伸江委員、ラッシラ エルッキ タピオ委員は欠席のため別途意見聴取)
- 4 議題 市立高校が育てたい人材像
- 5 主なご意見

これからの市立高校が育てたい人材像の案として、以下の3つを挙げ、ご意見をいただいた。

- ①多様性への深い理解や幅広い知識と発想力を活かし、世界で活躍する人
- ②他者と協働して課題を解決し、地域に貢献できる人
- ③チャレンジ精神を持って新たな価値を創造できる人

【「①多様性への深い理解や幅広い知識と発想力を活かし、世界で活躍する人」について】

- ・何が起こるか分からない世の中で、企業では多様な解決方法の提案が必要とされる。幅広い知識というより、特定の分野での最高点が高い人材(卓越性)が求められている。
- ・「幅広い」という文言は一般的な様々な知識というニュアンスだと思うが浅く感じる。世界で活躍する人になるにはどんな知識が必要なのか共有したうえで、検討する必要がある。
- ・例えば、今後人口が減って、工場が日本で立ち行かなくなり、海外に出ていくことが多くなるとすると、英語力がないと信頼してもらえない。英語能力やIT能力は基礎能力として大切になるだろう。

【「②他者と協働して課題を解決し、地域に貢献できる人」について】

- ・「他者」は、例えば地元企業や大学生、地元の商店街の人などをイメージできればいいと思う。
- ・若年層について、他者と議論をして折り合いをつける能力が低下しているように思う。高校段階では、自分と他者の違いや、地域によって住んでいる人の考えや抱えている課題が異なることをしっかり理解することが大切である。
- ・大人からの期待を込めて、「神戸の未来をつくる」ということを感じさせる言葉があると良い。絶え間なく課題が顕在化する現代においては、「多様な課題を解決し」とすることで、様々な地域に貢献でき、未来をつくる人材というニュアンスを持たせられるのではないかと。

【「③チャレンジ精神を持って新たな価値を創造できる人」について】

- ・大人の考える伝統、慣習、文化は高校生世代にとってはすでに変わってきており、例えば手紙やはがきを書いたことがないなど、日本の伝統的な文化が若者に継承されていない状況で、

どのような新たな価値が生まれてくるのか見えにくいところである。

- ・ 学生に対する期待を直接的に表しており、新たな価値を学生自身が見いだせる文言となっており、よいと思う。

【全体について】

- ・ 3つの人材像は起業家育成的な内容だが、社会はいろんな人がいてバランスが取れている。自分の好きなことを追求する人もいれば、他人をサポートすることが好きな人もいる。どうアクションするかは各々の自由だと思う。
- ・ どれにも通じることだが、主体性をもって行動すること、コミュニケーションを取れることが大事だと思う。
- ・ 「こういうふうに教育したい」という思いとは別に、生徒が市立高校の魅力をどこに感じているのか把握し、育てたい人材像をある程度合わせていく必要があるかもしれない。

【高校が育てたい人材像の位置づけについて】

- ・ 多国籍の住民が社会で一緒に働く前段階として、高校において、多様性への深い理解や異文化理解、他者と協働するということが、カリキュラムの中でカバーされているのではないかな。
- ・ 大学や企業でも能力を磨いていくので、高校が目指す人材像としては、先々の可能性を自分で選び取れるようなものでも良いのではないかな。
- ・ 市立高校の育てたい人材像の位置づけについて、どういう枠組みの中で考えていくのか示されると議論しやすい。例えば「学習指導要領をベースとしてそれに上乘せするもの」、あるいは、「高校で手が打てる範囲の人材像」など。

【①～③以外の人材像について】

- ・ レジリエンス（困難をしなやかに乗り越え回復する力）というか、自分の人生をタフに生きる力といった要素を入れても良いのではないかな。
- ・ 生徒が自分自身と徹底的に向き合い、やりたいこと、もっと上手になりたいこと、自身の幸福を見つけることが重要である。
- ・ 日本語の「生き甲斐」という概念が世界的に受け入れられている。好きなこと＝得意なことで報酬を得て、なおかつそれが世の中から求められているという状態であり、そういうことを目指していくのもいいと思う。
- ・ 世界や地域で活躍したり新たな時代を切り開く人には、人の痛みや気持ちがわかる人であってほしい。
- ・ 不登校や多様な特性を持った生徒もいる中で、どう接し、どんなことを一緒にできるのか、自分より弱い立場の人々に思いをはせるような人材が必要である。